

『聖位經』における諸問題

——不空と空海を中心として——

佐藤 憲 英

一、はじめに

弘法大師空海（以下、空海）は、『弁顕密二教論』⁽¹⁾（『二教論』）をはじめとした著作中で、様々な経典儀軌を引用し、自身の教理の裏付けをはかっている。このように引用される代表的な経典の中に、『金剛頂經』がある。『金剛頂經』には十八会十万頌の経典群を指す「広義の金剛頂經」と、不空訳三巻本の『金剛頂一切如来真实撰大乘现証大教王經』を指す「狭義の金剛頂經」とがある。現在、単に『金剛頂經』といった場合は、後者の「狭義の金剛頂經」、すなわち不空訳三巻本を指す場合が多い。ただし、空海が『金剛頂經』と引用する経典は、「広義・狭義の金剛頂經」とどまらない。空海は、『金剛頂瑜伽略出念誦經』⁽²⁾（『略出念誦經』）、『金剛頂瑜伽大三昧耶真实理趣經』や『金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經』⁽³⁾（『瑜祇經』）、『金剛頂瑜伽十八会指帰』等、合計十四の経典を「金剛頂経曰」や「金剛頂経説」と引用し、いわゆる「金剛頂経系の経典」を総称して『金剛頂経』と扱っている⁽⁴⁾。

このような空海が『金剛頂經』として引用する経典の一つに、『聖位經』がある。この経典は、「序」で「真言陀羅尼宗者⁽⁵⁾」と述べられており、「真言宗」の宗名の基盤となった経典であるとされる。さらには、四種法身について

も述べられており、真言宗の教理としても欠かせない經典である。これほど重要な經典であるが、空海が真言宗の学徒の学習すべき経律論を指定した『真言宗所学経律論目録』(『三学録』)では『聖位経』は収録されていない。

この經典は、『秘密曼荼羅教付法伝』(『広付法伝』)・『真言付法伝』(『略付法伝』)・『二教論』・『平城天皇灌頂文』⁽⁵⁾で引用される。空海は『弁顕密二教論』において、「秘藏金剛頂經説」・「又分別聖位經云」・「金剛頂分別聖位經云」⁽⁶⁾と名称を示しながら三度引用する。この著作に対して、『即身成仏義』・『平城天皇灌頂文』・『性靈集』では、いずれも「金剛頂説」、あるいは經典名を明示せずに引用する。

また、空海は『聖位経』の「序」部分のみの引用に留めており、本文には触れていない。こうした側面から、『聖位経』「序」部分の研究は活発に行われているが、この經典自体の研究は注目されていないのが現状である。

現在、この『聖位経』は『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』とされ、空海が請来したとされている。しかし、この『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』は空海の『御請来目録』⁽⁷⁾にはその名称が確認できない。『御請来目録』では、似た名称の經典として『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』が確認できるのみである。なお、『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』は『大正新修大藏経』に収載されていない。

そこで、今回はこの二つの經典の關係性を、先行研究や目録類を参照していきながら、詳しく検討していくことにする。

一、『聖位経』について

まずは、空海が引用する『聖位経』について見ていくこととする。『聖位経』は先に述べた通り、「序」と「本文」

で構成されている。「序」は、以下の通りである。

略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門序^⑩

- ① 夫眞言陀羅尼宗者。是一切如來祕奧之教。自覺聖智頓證法門。亦是菩薩。具受淨戒無量威儀。入一切如來海會壇。受菩薩職位。超過三界。受佛教勅三摩地門。具足因緣。頓集功德廣大智慧。於無上菩提。皆不退轉。離諸天魔一切煩惱及諸罪障。念念消融。
- ② 證佛四種身。謂自性身受用身變化身等流身。滿足五智三十七等不共佛法。
- ③ 然如來變化身。於閻浮提摩竭陀國菩提場。中成等正覺。爲地前菩薩聲聞緣覺凡夫。說三乘教法。或依他意趣說。或自意趣說。
- ④ 種種根器種種方便。如法修行。得人天果報。或得三乘解脫果。或進或退。於無上菩提。三無數大劫。修行勤苦。方得成佛。
- ⑤ 王宮生雙林滅。遺身舍利起塔供養。感受人天勝妙果報。及涅槃因。不同報身毘盧遮那。
- ⑥ 於色界頂第四禪阿迦尼吒天宮。雲集盡虛空遍法界一切諸佛。十地滿足諸大菩薩證明。警覺身心。頓證無上菩提。
- ⑦ 自受用佛。從心流出無量菩薩。皆同一性。謂金剛性。對遍照如來。受灌頂職位。彼等菩薩。各說三密門。以獻毘盧遮那及一切如來。便請加持教勅。
- ⑧ 毘盧遮那佛言。汝等將來。於無量世界。爲最上乘者。令得現生世出世間悉地成就。
- ⑨ 彼諸菩薩受如來勅已。頂禮佛足。圍繞毘盧遮那佛已。各還本方本位。成爲五輪。本願懺懺。
- ⑩ 若見若聞。若入輪壇。能斷有情五趣輪轉生死業障。於五解脫輪中。從一佛至一佛。供養承事。皆令獲得無上菩提。成決定性。猶如金剛不可沮壞。

- ⑪ 此即毘盧遮那聖衆集會。便爲現證鞏塔波塔。一一菩薩一一金剛。各住本三昧。住自解脫。皆住大悲願力。廣利有情。
- ⑫ 若見若聞。悉證三昧。功德智慧頓集成就矣

①～②では真言陀羅尼宗と四種法身について、③～⑤では變化身（釈尊）について、⑥～⑩では毘盧遮那とそこから流出した菩薩たちについて、⑪～⑫では卒塔婆について述べられる。先に述べたように、①の部分で「真言陀羅尼宗」と述べられており、「真言宗」の宗名の基盤となった經典であるとされ、②の部分で四種身について言及している。これらの①～⑫の「序」部分のみを空海は自身の著作で引用する。その著作と引用箇所は以下の通りである。

- 1 『広付法伝』 …… 『具如金剛頂經説』^①
- 2 『略付法伝』 …… 『金剛頂瑜伽經説』^②
- 3 …… 『金剛頂經説』^③
- 4 『二教論』 …… 『若據秘藏金剛頂經説』^④
- 5 …… 『又分別聖位經』^⑤
- 6 …… 『金剛頂分別聖位經』^⑥
- 7 『平城天皇灌頂文』 …… 『故金剛頂説』^⑦
- 8 …… 『又金剛頂説』^⑧

1の『広付法伝』、3の『略付法伝』では、第二祖金剛薩埵の解説において『聖位經』「序」の⑦・⑧を引用する。ここでは、「遍照如来」を「法身如来」に言い換えて引用を行っている。直前の第一祖である大日如来の解説では、「高祖法身大毗盧遮那与自眷属法身如来」^⑨と述べているため、ここで⑦・⑧の部分引用することにより、第一祖の大日

如来から灌頂と職位、教勅を受けていることを示しているのである。

2の『略付法伝』では、『聖位経』「序」の③～⑩の部分を用いる。ここでは、第一高祖の法身大日如来の解説の中で、応化仏・報仏・法性仏の所説の教法はそれぞれ不同であると解説するために引用する。

『一教論』の4では、『聖位経』を「秘藏金剛頂経」として③の部分を用いる。空海は、この③の部分に説かれる如来変化身と地前菩薩との関係性を利用し、顕密二教の優劣を明らかにしている。

5の部分では、空海が『菩薩瓔珞本業経』、『瑜祇経』、そして『聖位経』「序」の⑦部分を用いし、『金剛頂経』に説かれる毘盧遮那仏自受用身所説の法が、理智法身の境界であること、そしてこの法身等は自受法楽の故にこの内証智の境界を説くであると解説する。

6では、①～⑫の『聖位経』「序」全体を用いる。空海は、②の最後に「此標宗大意」、⑤の部分には「此略釋迦如来之教及得益也」²²⑥の部分には「此表受用身説法得益也」²³⑫の最後に「此説自性身自受用身説法及得益」²⁴と割注をしている。こういった割注より、空海はこの『聖位経』「序」全体を用いることで、四種身・三身の説法と得益を明らかにすることが目的であろう。また続けて「喩曰。此経明説三身説法差別浅深、成仏遅速勝劣。与彼楞伽三身説法相義合。顕学智人皆遵法身不説法。此義不然。顕密二教差別如此、審察審察。」²⁵と喩釈がされている。

『平城天皇灌頂文』では7の部分で①～②、その後には『大乘理趣六波羅蜜経』を用いし、続けて残りの③～⑫の8の部分を用いる。⑥の部分には「此明報佛説法」²⁶と割注があり、⑧の「毘盧遮那」を「大日尊」と言い換えている。ここで『聖位経』「序」全体を用いることで、法界体性智の大日如来、五智所成の四種法身、金剛薩埵をはじめとする無量の菩薩等の真言宗の根底的教理を端的に説明しているのである。

このように、空海は『聖位経』「序」を一部、あるいは全体を用いながら、自身の教学の裏付けをしていくのである。

三、先行研究での扱い

ここでは、『聖位経』についての先行研究をまとめていく。

目録類上で確認できる二種類の『聖位経』について、長部「一九九〇」は

ここで、①『十八会指帰』と②『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』を比較検討してみよう。この経文は、『大正藏経』本では②『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』一卷に相当し、これと克似の経文である『金剛頂瑜伽略述三十七尊心要』と『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』とも読みあわせてみる必要がある。²⁷⁾

と述べており、『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』と『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』は同一の經典であると述べている。克似の経文として『金剛頂瑜伽略述三十七尊心要』²⁸⁾と『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』²⁹⁾を挙げていることにも充分に留意したい。また、同じように二種類の『聖位経』について、向井「二〇〇〇」も次のように述べている。

『分別聖位経』は具さには、『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』といい、大正大藏経第一八巻に不空訳一卷として所収され、序もついている。『不空三蔵表制集』のいわゆる自撰目録にも掲載され、そこには『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』とあり三十七尊が題名に入れてある。序がこの時点から、一具のものであったのかどうかについては不明である。³⁰⁾

ここにおいても『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』と『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』は同一であるとしている。この二人の他にも、小野塚「二〇〇〇」³¹⁾、遠藤「一九九四」³²⁾等、多くの研究で、これら二經典は同一であると

いう前提で見解が述べられている。⁽³³⁾

これらのように、先行研究では、空海の引用する『聖位経』は『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』であり、『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』でもあるという前提で研究が進められているのである。

四、二経典の関係性

ここからは、この二経典の比較をしていくために、『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』をA、『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』をBとして比較を行っていく。先に述べた通り、先行研究においては、このA・B両経は同一経典と扱われているが、この二経典が確認できる目録を見ていく。まず、『聖位経』の写経録を見ていく。

○『東寺観智院金剛藏聖教目録』
5分別聖位経

○平安時代承保三年写、朱点(ヲコト点・宝幡院点・承保三年)、粘葉装柀型、斐紙(楮交り)、縦一七・七、横一四・七、二四紙

〔外題〕 分別聖位経

〔内題〕 ①略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門序

②略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門經一卷

〔尾題〕 略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門經一卷

『聖位経』における諸問題

略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門經 一校了 道胤 同(折本) 12

○『名取新宮寺一切経』⁽³⁵⁾

899 金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門

書寫年代 鎌倉中期 料紙 斐楮交漉紙

法量 紙数 一三 全長 六・五

奥書 二交了

完 缺 表紙半欠

備考 首題 「略述金剛頂瑜伽分別聖位脩證法門序」

(聖、脱力)

「略述金剛頂瑜伽分別位脩證法門経」

尾題 「略述金剛頂瑜伽分聖位脩證法門経一卷」

以上のように記されている。この二つの記録でも、Aの経題名は記載されておらず、Bの経題名での写経が行われたということが明らかである。『七寺一切経』で『聖位経』を写経した「道胤」は、安元二(一一七六)年に『大毘盧遮那成仏神変加持経』⁽³⁶⁾や『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大教王経』⁽³⁷⁾等を書写していることが同目録において確認できる。また、『名取新宮寺一切経』は鎌倉中期に書写されたということが記されているため、今回、確認できた日本の写経録においては『東寺観智院金剛藏聖教目録』の記録が一番古い。写経録においてはAの経典名は確認できないが、B「略述金剛頂瑜伽分別聖位脩證法門」は「序」と「本文」が存在するということが確認できた。

続いて、A・Bそれぞれの名称が確認できる、目録類を見ていくこととする。

A 『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』について

A 『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』は、不空の訳経經典集をまとめた『代宗朝贈司空大辨正広智三蔵和上表制集』(『表制集』)卷三、七九五年に編纂された『大唐貞元統開元釈教録』(『統開元録』)、空海が入唐する直前の八〇〇年までに編纂された『貞元新定釈経目録』(『貞元録』)、そして空海の『御请来目録』にその名称が見られる。しかし、空海が入唐中に橘逸勢や写经生らと共に写経した小冊子の『三十帖策子』や、『三学録』にはその名が見られない。以下にまとめを記していく。

○ 『代宗朝贈司空大辨正広智三蔵和上表制集』第三卷^③

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷

○ 『大唐貞元續開元釋教録』卷上^④

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷 并序

● 『大唐貞元續開元釋教録』卷下^⑤

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷 十三紙

序并
經中云修
證法門序

○ 『貞元新定釋教目録』卷第一^⑥

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷

● 『貞元新定釋教目錄』卷第十五¹⁷

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷

并序
修證法門
經中云
證法門序

● 『貞元新定釋教目錄』卷第二十二¹⁸

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷

并序
經中云
證法門序

○ 『貞元新定釋教目錄』卷第二十七別錄之八¹⁹

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷 大唐三藏沙門大廣智不空譯

○ 『御請来目錄』²⁰

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷 一十三紙

● 印を付した『続開元録』巻下、『貞元録』巻十五・二十二の割注では、「并序經中修證法門序」と記されている。下線部の「修證法門」はBの經題名で使われている語句である。このAの經中で説かれる「修證法門」をBの經題名に使用したとするならば、A・Bの『聖位經』は、同一の經典である可能性が高いと言えるだろう。また、「序」がこの頃から付与されていたということも確認できる。

B 『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』について

続いてB 『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』について述べていく。このBの名称は、『表制集』や『貞元録』等にはその名称が見られず、空海関連の目録類である『三十帖策子』・『御請来目録』・『三学録』においても記載されていない。このBの經典名が確認できるのは、円仁の『入唐新求聖教目録』⁽³¹⁾と安然の『諸阿闍梨眞言密教部類總録』⁽³²⁾である。

安然の『諸阿闍梨眞言密教部類總録』は、入唐八家のそれぞれの目録に記載される経軌を二十部に分類している目録である。⁽³²⁾この安然の目録では様々な目録の比較をし、自身で割注をしている目録である。例えば、『金剛頂一切如来眞實攝大乘現証大教王經』と『略出念誦經』⁽³³⁾は以下のように記されている。

○『諸阿闍梨眞言密教部類總録』

金剛頂一切如来眞實攝大乘現証大教王經三卷 不空 海仁行 蓮珍敬

金剛頂瑜伽眞實大教王經三卷 海 叡

金剛頂瑜伽眞實大教王經三卷 内云金剛頂一切如来眞實攝

大乘現証大教王經不空譯貞元新入
目錄淨和院月輪寺(云)上三同經

金剛頂瑜伽中略出念誦經四卷 金剛智 珍海

頗治有六加爲減四

金剛頂瑜伽中略出念誦經四卷 散興也
少眞也

金剛頂瑜伽中略出念誦法四卷 亦云經貞元錄
梵釋寺圓覺寺

欠注私云上同經已上六四
兩經海定也六爲四互有加減

『金剛頂一切如来真実摂大乘現証大教王経』は、目録によつて名称が変化する經典である。このような經典には、安然是「同経」という割注をしている。名称が異なつていても同じ經典であるということを示している。

これに対し、『金剛頂略出念誦経』を記している箇所では、「少異也」の割注が確認できる。名称が同一であっても、内容に差異がある場合はこのように示しているのである。

これらを踏まえて『聖位経』の部分を確認すると

○『諸阿闍梨真言密教部類總録』⁵⁴⁾

金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門 一卷 序并

經中云修證法門不空譯貞元
新入目錄海無注圓覺缺注

略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門序 一卷

不空 仁珍叡私
云是前本也

このように、『諸阿闍梨真言密教部類總録』では「略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門序一卷不空」の後に「仁珍叡私云是前本也」と割注が付けられている。この前には「金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門一卷」の經典が記されており、「并序經中云修證法門不空譯貞元新入目錄海無注圓覺缺注」と割注が付けられている。このBの割注に依れば、A・B両経は名称のみが異なっているだけで、内容は全く同じである經典だということになる。もしも、校訂や再治が行われて、A・Bの内容が異なっているのであれば、「異」と割注に記されているだろう。Bの経題名に付与されている「略述」は、『略出念誦経』の「略出」と同じように「広義の金剛頂経」から略述したという意味合いになるであろうか。

また、Aは經典一卷と「序」があり、Bは經典の「序」が一卷あると読み取ることでもできる。この場合、割註の「是

前本也」の「是」は「並序」を指している可能性も考えられる。このように解釈するのであれば、Aの「序」がBの「序」と同一であるということになろう。先に述べた通り、『東寺観智院金剛藏聖教目録』第一巻にはBの經典の「序」と「本文」が分けられて示されていることからその可能性は高いと言えよう。

しかし、それらと同時に「同」の文字も割注では記していないことに留意したい。A・Bの二經典が同じ經典である場合は『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大教王経』のように、「同経」と割注に記しているだろう。A・Bが同じ經典ではないとすると、A『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』が正本であり、B『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』が略述本という関係になると考えられる。あるいは、Aの経題名のつく經典が現存していないという点や、Aの經典に記される語句をBの経題名に使用している点等から、Aを改訂、再治したものがBという関係性になるであろうか。Bの経題名にある「略述」が「広義の金剛頂経」にかかるのか、Aの經典にかかるのか、目録上での確認のみでは定かではない。

いづれにしても、Aが請来された、空海の入唐は延暦二十三年（八〇四）年、Bが請来された、円仁の入唐は承和五（八三三）年である。この約三十年の間に『聖位経』の名称が唐においてAからBに変化したということは間違いない。あるいは、Aの再治や改訂が行われ、Bに置き換わったという可能性があると見えよう。Aの内容が確認できない以上、確定ができない。

五、まとめ

- ・空海は、自身の著作において、十四種の經典を『金剛頂経』として引用する。
- ・空海が引用する『金剛頂経』の中に、『聖位経』が含まれている。

- ・『聖位經』を空海は『二教論』・『即身成仏義』・『平城天皇灌頂文』・『性靈集』で引用するが、いずれも『聖位經』「序」のみからの引用である。
- ・空海は『二教論』で引用する場合のみ、『聖位經』の名称を明示して引用する。
- ・『聖位經』は目録上では二種類確認できる。A『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』とB『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』である。A・Bいずれも空海の『三十帖策子』『三学録』に記載されていない。
- ・A『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』は、『続開元録』・『貞元録』・『御請来目録』でその名称が確認できる。しかしながら、『大正藏經』には収載されていない。
- ・今確認できた日本での写経録、『東寺觀智院金剛藏聖教目録』・『七寺一切經』・『名取新宮寺一切經』の記録では、Bの經典名で「序」と「本文」が写経されたことが確認できる。
- ・B『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』は、円仁の『入唐新求聖教目録』・安然の『諸阿闍梨眞言密教部類總録』でその名称が確認できる。『大正藏經』八七〇番に収載されている。
- ・『諸阿闍梨眞言密教部類總録』でのBの割注には「是前本也」とあり、「少異」などが記されていないことから、A・B両經は名称が異なるだけで同じ經典であると言える。
- ・『諸阿闍梨眞言密教部類總録』の記述によれば、Aは「本文」一卷と「序」があり、Bは「序」が一卷あるとも読み取ることができる。その場合、Aの「序」部分とBの「序」が同様であると考えられる。
- ・『諸阿闍梨眞言密教部類總録』でのBの割注には、「同經」と記されていないため、A『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』が正本、B『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』が略述本の関係である可能性があるとも言える。
- ・A・B二經典の名称の変化、あるいはAの再治・改訂といった經典の置き換わりがあったと仮定するならば、空海入唐と円仁入唐の約三十年の間で起きている可能性がある。

六、考察・今後の課題

- ・空海が『聖位経』「序」のみを引用していること。
- ・『三学録』に記載されていないこと。
- ・A『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』の経題名のつく經典名が現存していないこと。

これら三点から、A・B二經典が同經典である場合と別經典である場合で、以下のような二点の仮説を立てることができる。

1. A・B二經典が同經典である場合

空海が実際に見た『聖位経』は、『統開元録』に「十三紙」とあり、『御請来目録』にも「十三紙」とあるため、現存する『聖位経』と同じものであると考えられる。『聖位経』「序」は自身の教学を解説するために非常に活用できるものであり、著作に引用した。しかし、『聖位経』「序」と「本文」に差異が生じており、混乱を避けるためにあえて、『三学録』に記載しなかったという可能性である。この説を進めていくためには、『聖位経』「序」と「本文」の内容精査が必要となってくる。

2. A・B二經典が別經典である場合

『御請来目録』は『貞元録』を基に記しているため、「十三紙」と記したが、実際にはA『金剛頂瑜伽三十七尊分別聖位法門』全体を手に入れることができず、「序」のみ持っていたという可能性である。そのため、空海は『聖位経』の「序」部分のみしか引用ができず、『三学録』に記載できなかったのではないだろうか。そう言うことであれば円仁は、日本で『聖位経』が確認できなかったために、入唐した際にBの『聖位経』を入手したと考えられる。しかし、いずれの仮説も未だ推測の域を出ない。

現在『聖位經』の写経の記録を確認中である。空海帰朝から円仁帰朝までの約三十年の写本や写経録が出てこない限り、決定的な根拠とはならないであろう。今後とも、調査を続けて、『聖位經』の名称の変化や当時の状況を見極めていきたい。

註

- (1) 『定本弘法大師全集』 第三卷 七三頁
 (2) 經典名

| | 卷数 | 訳者 | 大正蔵 番 |
|--------------------|----|-----|----------|
| ① 金剛頂瑜伽眞實大教主經 | 三卷 | 不空 | 八六五番 |
| ② 金剛頂瑜伽念誦經 | 四卷 | 金剛智 | 八六六番 |
| ③ 金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經 | 一卷 | 不空 | 八六七番 |
| ④ 金剛頂瑜伽大三昧耶眞實理趣經 | 一卷 | 不空 | 二四三番 |
| ⑤ 金剛頂瑜伽五秘密修行儀軌經 | 一卷 | 不空 | 一一二五番 |
| ⑥ 金剛頂瑜伽毗盧遮那三摩地法經 | 一卷 | 金剛智 | 八七六番 |
| ⑦ 瑜伽金剛頂經釋字母品 | 一卷 | 不空 | 八八〇番 |
| ⑧ 修習般若波羅蜜菩薩觀行念誦儀軌經 | 一卷 | 不空 | 一一五一番 |
| ⑨ 金剛頂瑜伽十八會指歸 | 一卷 | 不空 | 八六九番 |
| ⑩ 金剛頂大三昧耶理趣釋經 | 一卷 | 不空 | 一〇〇三番 |
| ⑪ 略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門 | 一卷 | 不空 | 八七〇番 |
| ⑫ 都部陀羅尼目 | 一卷 | 不空 | 九〇三番 |
| ⑬ 成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌 | 一卷 | 不空 | 一〇〇〇番 |

⑭金剛頂經一字頂輪瑜伽一切時處念誦成佛儀軌 一卷 不空 十九卷 九五七番

※『菩提場所説一字頂輪王經』は、『三学録』『金剛頂宗部』に収録されるが、空海は「金剛頂經に云く」と引用しない。

- (3) 『大正新脩大藏經』第十八卷 二八七頁 下
『定本弘法大師全集』第一卷 四一頁
- (4) 『定本弘法大師全集』第五卷 一一頁
- (5) 『定本弘法大師全集』第三卷 七五頁
- (6) 『定本弘法大師全集』第三卷 一〇一頁
- (7) 『定本弘法大師全集』第三卷 一〇一頁
- (8) 『定本弘法大師全集』第一卷 一頁
- (9) 『大正新脩大藏經』第一八卷 二八七―二八八頁
- (10) 『定本弘法大師全集』第一卷 六九頁
- (11) 『定本弘法大師全集』第一卷 一一〇頁
- (12) 『定本弘法大師全集』第一卷 一二二頁
- (13) 『定本弘法大師全集』第三卷 七五頁
- (14) 『定本弘法大師全集』第三卷 一〇〇頁
- (15) 『定本弘法大師全集』第三卷 一〇一―一〇三頁
- (16) 『定本弘法大師全集』第五卷 一三―一四頁
- (17) 『定本弘法大師全集』第五卷 一四―一五頁
- (18) 『定本弘法大師全集』第一卷 六八頁
- (19) 『定本弘法大師全集』第一卷 六八頁

- (20) 『大正新脩大藏經』第二十四卷 一〇一〇頁、
『定本弘法大師全集』第三卷 一〇二頁
- (21) 『定本弘法大師全集』第三卷 一〇二頁
- (22) 『定本弘法大師全集』第三卷 一〇二頁
- (23) 『定本弘法大師全集』第三卷 一〇二頁
- (24) 『定本弘法大師全集』第三卷 一〇三頁
- (25) 『定本弘法大師全集』第三卷 一〇三頁
- (26) 『定本弘法大師全集』第五卷 一四頁
- (27) 長部和雄 『唐代密教史雜考』 一九九〇 一六六頁 溪水社
- (28) 『大正新脩大藏經』第十八卷 二九一頁
- (29) 『大正新脩大藏經』第十八卷 二九七頁
- (30) 向井隆健 「不空訳『分別聖位經』と自受法樂について『密教学研究』第三十二号 二〇〇〇 一三三頁
- ※向井氏は、「『二教論』成立考」(『豊山教学大会紀要』第二十四号 一九九六)「不空訳『分別聖位經』と自受法樂について」(『密教学研究』第三十二号 二〇〇〇)「『二教論』成立の時期の推定」(『密教学研究』第四十二号 二〇一〇)の三つの論文において『聖位經』について『二教論』や『秘藏宝鑰』等を踏まえて論述している。今回は『聖位經』の内容についての論文ではないため、これらの論文について言及するのは控える。
- (31) 小野塚幾澄 『空海教学における背景思想の研究』 二〇〇〇 山喜房佛書林 四三頁
- (32) 遠藤祐純 『新国訳大藏經』 一九九四 七頁
- (33) 「本軌は『表制集』『開元釈經錄』『統開元釈經錄』『貞元錄』等に見られ、わが国へは空海によって将来されている。」「『金剛頂瑜伽聖位法門經』には以下のように記される。
『金剛頂瑜伽聖位法門經』と『金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』の箇所には「略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門」

と記載があり『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』の箇所には「金剛頂瑜伽分別聖位修證法門」と記載あり。

- (34) 七寺一切経保存会『尾張史料 七寺一切経目録』一九六八
- (35) 東北歴史資料館『名取新宮寺一切経調査報告書』一九八〇
- ※『略出念誦経』・『不空訳三卷本』は平安後期の写本あり。
- (36) 「安元二年中興九月廿日壬申尅書写了 道胤 「一校了 道胤」
- (37) 「安元二年中興十月廿八日申尅書写了 執筆 金剛仏子道胤「一校了」
- (38) 国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所『日本現存八種一切経対照目録〈改訂版〉』(二〇二二)によれば、『聖語藏』・『金剛寺一切経』・『石山寺一切経』・『西方寺一切経』・『妙蓮寺蔵松尾社一切経』には『聖位経』は記載されておらず、『七寺一切経』・『興聖寺一切経』・『名取新宮寺一切経』には記載があるとしている。
- また、『高山寺経藏典籍文書目録』には確認できなかつた。
- (39) 『大正新脩大蔵経』 第五十二卷 八二六頁
- (40) 『大正新脩大蔵経』 第五十五卷 七四八頁
- (41) 『大正新脩大蔵経』 第五十五卷 七七一頁
- (42) 『三十帖策子・国宝 十地経策子』重要文化財』一九七七 法蔵館
- 『弘法大師真蹟集成』 一九七五 法蔵館 一〇七頁
- 『弘法大師書籍大成』 資料編 一九七九 東京美術 一三三頁
- 小野塚幾澄『空海教学における背景思想の研究』〔資料編〕四九八―五四八頁
- (43) 『大正新脩大蔵経』 第五十二卷 八三九頁
- (44) 『大正新脩大蔵経』 第五十五卷 七四九頁
- (45) 『大正新脩大蔵経』 第五十五卷 七六七頁

- (46) 『大正新脩大藏經』第五十五卷 七七二頁
 (47) 『大正新脩大藏經』第五十五卷 八七九頁
 (48) 『大正新脩大藏經』第五十五卷 九三四頁
 (49) 『大正新脩大藏經』第五十五卷 一〇二一頁
 (50) 『弘法大師全集』第一輯 七二頁
 『定本弘法大師全集』第一卷 七頁
 (51) 『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門序一卷不空』
 (『大正新脩大藏經』第五十五卷 一〇七九頁)
 (52) 『諸阿闍梨真言密教部類總錄』卷上(『大正藏』第五十五卷 一一一三頁)では
 「叡山澄和上録」・「高野海和上録」・「叡山仁和上録」・「靈巖行和上録」・「安祥運和上録」・「小栗暁和上録」・「叡
 山珍和上録」・「圓覺叡和上録」の八目録と「灌頂法録」・「大日散録」・「金剛頂録」・「四蘇悉地録」・「諸如来録」・「諸
 佛頂録」・「諸佛母録」・「諸經法録」・「觀世音録」・「諸菩薩録」・「金剛手録」・「普世天録」・「護摩供録」・「禮懺讚
 録」・「梵字論録」・「碑傳具録」の十六録と記している。
- (53) 『大正新脩大藏經』第五十五卷 一一一五頁
 (54) 『大正新脩大藏經』第五十五卷 一一一六頁

参考文献

- 『代宗朝贈司空大辨正広智三藏和上表制集』
 ・『大正新脩大藏經』第五十二卷 二二二〇番

『大唐貞元續開元釈教録』

- ・『大正新脩大藏經』 第五十五卷 二二一五六番

『貞元新定釈經目錄』

- ・『大正新脩大藏經』 第五十五卷 二二一五七番

『三十帖策子』

- ・『三十帖策子』 国宝十地経策子…重要文化財』 一九七七 法蔵館
- ・『弘法大師真蹟集成』 一九七五 一〇七頁 法蔵館
- ・『弘法大師書籍大成』 資料編 一九七九 一三二頁 東京美術
- ・小野塚幾澄『空海教学における背景思想の研究』〔資料編〕 四九八―五四八頁

『御請来目錄』

- ・『弘法大師全集』 第一輯 六九頁
- ・『定本弘法大師全集』 第一卷 一頁

『真言宗所學経律論目錄』

- ・『弘法大師全集』 第一輯 一〇五頁
- ・『定本弘法大師全集』 第一卷 四一頁

『大唐新求聖教目錄』

・『大正新脩大藏經』 第五十五卷 二一六七番

『諸阿闍梨真言密教部類總録』

・『大正新脩大藏經』 第五十五卷 二一七六番

『日本現存八種一切經対照目錄』〈改訂版〉二〇二一

国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所

『東寺観智院金剛蔵聖教目錄』

京都府教育委員会 『京都府古文書等緊急調査報告 東寺観智院金剛蔵聖教目錄』 一九七五

『七寺一切経』

七寺一切経保存会 『尾張史料 七寺一切経目錄』 一九六八

『名取新宮寺一切経』

東北歴史資料館 『名取新宮寺一切経調査報告書』 一九八〇